

# 子どもの本

## 研究会



35周年

子どもにおはなしを  
本のたのしみを!

### 【私の一冊】



### 『おじいさんのハーモニカ』



今村 葦子

ジョージア州の、ある鉄道線路のそばの小さな家に、おじいさんがひとり、住んでいました。——という書き出しではじまる、絵本『おじいさんのハーモニカ』は、いまから三十三年前の一九八七年十月に佑学社から出版されました。作者はヘレン・V・グリフィス。絵はジェイムズ・ステイーブンソン。訳は私です。

この絵本が出版される一年前に、私の生まれてはじめての本、『ふたつの家のちえ子』が出版されています。その本を読んだ編集者で、現在は翻訳者として活躍中の千葉茂樹さんが、ぜひ翻訳をとすすめてくださったのがこの本です。当時、私は絵本作作はおろか、翻訳をすることなど、まったく考えてもいませんでした。しかし、おじいさんと孫娘の世界には、私にもおぼえがありました。この孫娘は、まるまるひと夏、おじいさんの家にあずけられるのです。はじめのうち、孫娘はもじもじしているのですが、おじいさんが畑仕事をはじめると一緒にお手伝いをします。おじいさんは、孫娘に小さなクワを与え、孫娘が大事な野菜の若葉を踏んづけても何も言いません。そのかわりに「おかげではかどった」と言うのです。そしてふたりは、畑仕事の昼休みに木陰に寝ころび、ジョージアの夏の虫たちの歌声にきき入るのです。これらの情景は、ほとんど私の幼い頃と重なります。私の祖父は草笛を吹き鳴らしましたが、ジョージアのおじいさんは、夕暮れどきのひととき、ポーチに座ってハーモニカを吹き鳴らします。昼間、歌ってくれた鳥や虫たちへのお返しのお歌なのです。それからと続くこの物語のクライマックスは、やがて訪れるおじいさんの病気と、それに寄りそう孫娘の活躍です。そくそくと胸にせまり、忘れがたい余韻を残します。この絵本は、まさに出版と同時に名作の風格をそなえていました。その後、小学校の国語教科書に長く掲載され、その間佑学社が会社を閉じることになり、あすなる書房にバトンタッチされましたが、発売以来、変わらずに版を重ねている文字通りのロングセラー絵本なのです。ときどき、なつかしく思い出しては読む、私の一冊です。

(作家)